



# 大会後に残したいもの

平成35(2023)年に開催される両大会を成功させることで、両大会後も永く佐賀県に残したいものを、「さがんレガシー\*」として表しました。

## さがん 2 レガシー



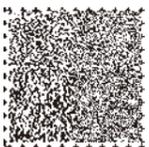
アスリートが活躍する さが

佐賀県ゆかりのアスリートやチームが、オリンピック・パラリンピックや国体など、世界や国内トップレベルの舞台で活躍し、県民に元気と誇りを与えている。

- 例えは
- ◇ 佐賀出身の金メダリストの祝勝パレードで通りが埋め尽くされた。
  - ◇ 他県の人から「佐賀はアスリートの宝庫だね」と言われるようになった。
  - ◇ 子どもたちは、小さいころからいろんなスポーツ種目を経験している。

※さがんレガシー

「佐賀の」を意味する「さがん」と、「遺産」を意味する英語「legacy(レガシー)」を合わせた言葉で、両大会後に佐賀県に残したいものこと。



## さがん 1 レガシー



誰もがスポーツを楽しむ・語る さが

誰もが、それぞれのライフスタイルやライフステージに応じて、「する」「観る」「支える」など、日常的にスポーツを楽しむことができている。また、生活の様々な場面で、世代を超えてスポーツを語らっている。

- 例えは
- ◇ 町中でウォーキングなどをする人を多く見かけるようになった。
  - ◇ スタジアムでの試合日は朝からイベントなどで盛り上がっている。
  - ◇ スポーツボランティアが選手と同じように尊敬されている。
  - ◇ 競技場で祖父が孫に懐かしいスポーツの話をしている。
  - ◇ 障がいの有無に関わらず、人々のコミュニケーションが広がっている。

## さがん 3 レガシー



スポーツツーリズムの拠点 さが

佐賀県の豊かな自然、歴史、文化などの魅力が発信され、多くの人が国内外から観光やスポーツイベントやキャンプ・合宿で佐賀を訪れ、交流するなど、スポーツによって地域が賑わっている。

- 例えは
- ◇ 国内外からスポーツキャンプを訪れた選手たちと地域の人が交流している。
  - ◇ 大会をきっかけに佐賀県のファンになった人が今年も来てくれた。
  - ◇ 毎年大きなスポーツイベントが開催され、国内外から観客が集まっている。



# 国民体育大会・全国障害者スポーツ大会の概要

## 国民体育大会

昭和21(1946)年の第1回大会開催以来、毎年各都道府県持ち回り方式で、また、第3回大会からは都道府県対抗方式で、国民スポーツの普及、競技者・指導者の育成、スポーツ施設の整備、スポーツ組織の充実など、スポーツ振興体制の確立とスポーツ文化の形成に総合的に寄与する、国民の各層を対象とする体育・スポーツの祭典として開催されています。

昭和36(1961)年からは国のスポーツ振興法に、平成23(2011)年からはスポーツ基本法に定める行事の一つとして、(公財)日本体育協会・文部科学省・開催地都道府県の三者共催で行われています。

本県では、昭和51(1976)年に「さわやかに すこやかに おおらかに」のスローガンの下、スポーツの本質と本県の実情に即した質実国体を目指して、「若楠国体」をテーマとして開催し、天皇杯(男女総合優勝)も獲得しました。

## 全国障害者スポーツ大会

昭和40(1965)年から身体に障がいのある人々を対象に行われてきた「全国身体障害者スポーツ大会」と、平成4(1992)年から知的に障がいのある人々を対象に行われてきた「全国知的障害者スポーツ大会」を統合した大会として、平成13(2001)年から国民体育大会終了後に、国民体育大会と同じ開催地で開催されています。

大会は、障がい者の社会参加の推進や、国民の障がいに対する理解を深めることを目的に開催されています。

平成23(2011)年からはスポーツ基本法に定める行事の一つとして、(公財)日本障がい者スポーツ協会・文部科学省・開催地都道府県等の共催で行われています。

本県では、昭和51(1976)年に「がんばって はげましあって わく希望」のスローガンの下、2日間の日程で「全国身体障害者スポーツ大会」を開催しました。